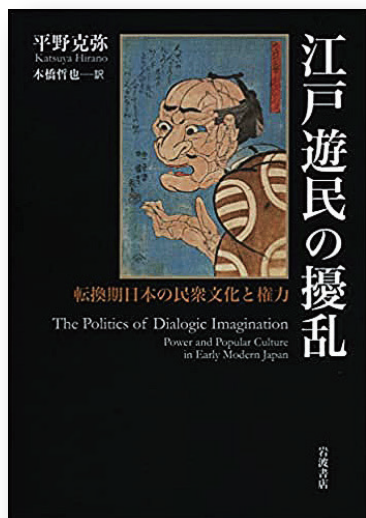


新収蔵資料抄

江戸遊民の擾乱 転換期日本の民衆文化と権力
The Politics of Dialogic Imagination

平野克弥／著 本橋哲也／訳 岩波書店 2021.8
348p 22cm 210.55/ネ 18 2021.10.8 受入 定価 4,600 円＋税

目次 (抜粋)

日本語版によせて

序章

第1章 包摂の戦略とそのアポリア

第2章 後期徳川文化におけるパロディと歴史

第3章 コミック・リアリズム — 転倒の戦略

第4章 グロテスク・リアリズム — カオスの戦略

第5章 近代化する日本と身体の変容

補章 歴史的叙述と本書の理論的視座

注 訳者あとがき(本橋哲也) 文献一覧 索引

※ 目次の詳細と訳者略歴は裏面に記載

最寄り図書館に取り寄せ可

資料概要

戦乱の世に平和をもたらし国家統一を成し遂げた徳川政権は、その実績と天人相関説とをもって身分階層は天の秩序と説き、身分と職分による支配を正当化した。

歌舞伎・浮世絵・見世物興行といった娯楽に関わる人々や「通」を標榜してそれに興じる人々、こうした農本主義経済を外れた非生産的なリビドー経済に耽溺する人々は「遊民」と呼ばれ、徳川幕府からは怠惰で不道德で風紀を乱すものと見なされた。幕府はまた、このような文化実践が既定の秩序を攪乱する退廃的なエネルギーとなる可能性を防ぐために、それらを卑しいものとして規制を加え、城下町の周縁に封じ込めようとした。

支配層のこの認識は杞憂でなく、遊民は規範的現実の可変性や脆さを実証する存在だったという。遊民と見なされた井原西鶴や近松門左衛門は現世の規範では許されない感情の発露＝心中物を書き(第1章)、平賀源内や式亭三馬、山東京伝や十返舎一九らが規範と生活経験のズレを滑稽本でこき下ろした(第2章)。著者がコミック・リアリズムと呼ぶこのパロディは、徳川権力の労働分業体制や身分制を支える上下、貴賤、天地、知性・身体などの二項分類的世界観の限界を暴露した(第3章)。また、後期徳川時代の浮世絵などに表れたグロテスクなイメージ群は規範的判断を解体して象徴的秩序を脱神秘化した。著者はこれらのいわば擾乱が、武士の優越性に正当性を与えていた道徳的原則の破綻を白日の下にさらすことにつながったとする(第4章)。

一方、維新後の明治政府も民衆文化の統制を試み続けた。しかし、徳川幕府が社会の流動性を最小限にするこ

とを目的に身体が多様な欲望を制限したのに対して、明治期には身体を欲望から切り離すことを試み、個人を社会の基本単位とすることで、野心と競争心、向上心に満ちた心理的態度を個人に植え付け、身体をそれに従属させる形で国家建設と資本主義生産のために動員したと著者は考える(第5章)。明治政府は、思想、価値観、情動がそれぞれの人間を望ましい国民的・資本主義的主体へ作り変えるための第一の要衝と考えていた。この自己規律と勤勉による能力主義は、自助努力と自己責任を自然化させたという。

江戸で花開いた民衆文化。

なぜ徳川幕府はそれを統制しようと試みたのか、為政者はなぜ「跳梁する身体」を恐れたのか。本書は具体的な事例に則してこの問題を読み解き、江戸から明治にいたる近代転換期の日本の新たな歴史像を見せてくれる。グロテスク・リアリズムの章で17頁を充てる怪談「累物」の検証、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』に対する考察・叙述も興味深い。

執筆者

平野克弥(ひらの かつや) 1967年生。同志社大学法学部政治学科卒業。シカゴ大学で博士号取得。現在、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)歴史学部准教授。研究分野：日本近世・近代の文化史、思想史、歴史理論。著作に "Regulating Excess: Cultural Politics of Consumption in Tokugawa Japan" in G. Riello and U. Rublack eds., *The Right to Dress: Sumptuary Laws in a Global Perspective, c. 1200-1800* (Cambridge University Press), 「遭遇としての植民地主義」(成田龍一他編『環太平洋地域の移動と人種』京都大学学術出版会、2020年1月)など。

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料(図書資料・視聴覚資料)から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。

なお、本紙の内容はWebにも掲載しています。ご覧の際は右のQRコードをご利用ください。また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。



目次

訳者

本橋哲也(もとはし てつや)

1955年生。東京大学文学部英米文学科卒業。ヨーク大学で博士号取得。現在、東京経済大学コミュニケーション学部教授。研究分野：イギリス文学、カルチュラル・スタディーズ、演劇批評。著書に『ポストコロニアリズム』（岩波新書、2005年3月）、『思想としてのシェイクスピア』（河出書房新社、2010年8月）、『『愛の不時着』論』（ナカニシヤ出版、2021年9月）など、訳書にスキップランド『犬の帝国』（岩波書店、2009年9月）、バトラー『生のあやうさ』（以文社、2007年8月）、ウィーバー＝ハイタワー『帝国の島々』（法政大学出版局、2020年5月）など。

日本語版によせて

序章

第1章 包摂の戦略とそのアポリア

はじめに

- 1 徳川幕府のイデオロギー 新たな社会秩序のなかで身体を構想する
- 2 都市の空間と異種混合
- 3 初期徳川時代における権力の両義性と意図せざる歴史的展開
- 4 アノマリーなるものたち
- 5 感性の構造 浮世と中間的存在

おわりに

第2章 後期徳川文化におけるパロディと歴史

はじめに

- 1 貨幣、パロディ、新しい社会空間の生産
- 2 テクストと批評
- 3 パロディと表象空間
- 4 変革行為としての遊び
- 5 相対主義とフェティシズムとしてのパロディ

おわりに

第3章 コミック・リアリズム——転倒の戦略

はじめに

- 1 パロディの一形式としての滑稽あるいはコミック・リアリズム
 - 2 転倒というテクネー うがち、嘲り、あるいは辛辣な告発
 - 3 うがちを演じる身体
 - 4 江戸民衆文化における笑いとその象徴的意味
- おわりに コミック・リアリズムの能力とその意義

第4章 グロテスク・リアリズム——カオスの戦略

はじめに

- 1 「異様」「奇怪」あるいはグロテスクという概念
- 2 人間性の新たなビジョン
- 3 グロテスクなものの場所
- 4 カオス世界の表象

おわりに グロテスク・リアリズムの潜在力とその意義

第5章 近代化する日本と身体の変容

はじめに

- 1 新しい身体政治
- 2 身体としての「風俗」
- 3 権力の新形態、新たな主体

おわりに

補章 歴史的叙述と本書の理論的視座

注

訳者あとがき(本橋哲也)

文献一覧

索引